



Title	市場的社会関係と合理化過程(2):資本制度の生産様式と合理化過程
Author(s)	唐渡, 興宣
Citation	經濟學研究, 45(1), 86-107
Issue Date	1995-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31996
Type	departmental bulletin paper
File Information	45(1)_P86-107.pdf



市場的社会関係と合理化過程(2)

—— 資本制的生産様式と合理化過程 ——

唐 渡 興 宣

始めに——合理化過程への「パラダイム・チェンジ」

資本主義的生産様式を合理化過程において見るとき、それを産業革命、従って、機械制大工業を土台にして確立した資本主義から見てみよう。即ち、マルクスの『資本論』を合理化過程という視点から解釈変更してみよう。

トーマス・クーンはその『科学革命の構造』を「パラダイム・チェンジ」に求めている。自然科学の土台の上に技術学があり、その意識的適用の産物として機械が登場してきた。科学の応用である技術の発展もその意味では科学革命と同じように、「パラダイム・チェンジ」に規定されるものである。即ち、その変化とはある問いにおける変化であって、科学革命はそうした問題性の移動と結びついている。そうした問いはそこにおける人々の意識、生活、そこから湧出する関心に根差したものである。こうした基盤の上で展開する革命は科学的概念とその編成における大規模な変化に結び付いている。ここに概念における「通約不可能性」ということが提起されてくる。以上のことはフッサール流に言えば、科学とその土台としての人々の日常的な「生活世界」、原初的世界との関係の発生的な解明という問題に集約されることになる。この後期フッサール・クーンの問題性の系列をマルクスの問題設定のうちに置き直して以上の問題を見てみよう。

マルクスはその『ドイツ・イデオロギー』において人々の感性的世界から遊離し自立化している人々の意識、理念、理論をイデオロギーとし

て批判し、それをその土台、意味規定としての感性的世界のうちに連れ戻す共に、その感性的世界の批判的解剖学を展開するというのがマルクスの問題構成であった。マルクスは科学論、科学史を主題として展開したわけではないが、科学の応用としての技術についても以上のことを語ることができるし、マルクスは批判的技術史の可能性の方向性を以上の問題構成のうちに提示していた。

「批判的な技術学史は、総じて、18世紀のどんな発明も一個人に属することのいかに少ないかを証明するはずである。今までにはかかる著作は現れていない。ダーウィンは自然的技術学の歴史、即ち、動植物の生活のための生産用具としての動植物の諸器官の形成に、関心をむけた。社会的人間の生産的諸器官・特殊な各社会組織の物質的基礎の形成史も同様な注意に値するのではないか？そしてそれは比較的容易に提供されうるのではあるまいか？けだし、ヴィコのいうように、人類史が自然史と異なるところは、前者は我々が作ったのだが後者はそうではないという点にあるのだから。技術学は、自然に対する人間の能動的態度を、彼の生活の・従って彼の社会的生活諸関係及びそれから湧出する精神的諸表象の・直接的生産過程を、あらわにする」¹⁾

技術学が人間の対自然、対人間関係を包括した生活世界をその土台、意味規定として持つということは、技術に関しても同じである。技術

1) 『資』I, 612頁

には人間の自然に対する能動的態度、人々の生活諸関係における意識が表現されているのである。技術はその意味では人々の生活世界の表現であると同時にその構成部分でもある。従って、技術は人々の生活の様式とは無関係に突然到来して来るというものではない。

人々の経済的、政治的、文化的な諸力の有機的に統一された総体、政治社会と市民社会の均衡、調和を表現するものとしてそれをグラムシにならって「歴史的ブロック」というならば、この歴史的ブロックの表現であると同時にその産物として科学、技術が存在することになる。この歴史的ブロックの諸構成要素に凝集性とその方向性を与えるものはまさにそのうちに浸透しているある世界観、倫理的なものである。従って、この「歴史的ブロック」の上に打ちたてられる技術もそれに浸透されたものとなる。

我々はこうした「歴史的ブロック」を土台として資本主義を考えるとそこに浸透している倫理的なものといえ、直ちに想起するのがマックス・ウェーバーの「資本主義の精神」である。プロテスタンティズム、なかんずく《カルビニズムの職業観》からそれは発しているものであるが、その職業観の中核にあるのが予定説であった。これが《近代資本主義の精神》に不可欠の倫理的要素を与えたということは周知の思想史的常識に属する事柄である。だが、世俗的職業へのひたすらの精進は《神の栄光を顯す》ことであって、《富の蓄積》が問題ではなかった。禁欲して自己の職業に精進することの帰結ははからずも《富に蓄積》になる。それは職業への精進の《証し》であると同時に《自己が選ばれている者》の《証し》でもあった。その限りでは世俗的職業という場での信仰と経済倫理との間には乖離はなかった。だが、この信仰と経済倫理との乖離の瞬間に職業への精進が神の栄光を顯すことから富の蓄積へとその目的価値の転換が生じる。この転換という問題に対する解答はウェーバーではなく、トレルチを待たなければならなかった。この点については矢

島欽次氏が紹介されているのでそれを参考にしよう²⁾。即ち啓蒙期における《新プロテスタンティズム》においては、主体性が神の側から人間の側に委譲される土壤が用意されることになる。そうした委譲がなされたといっても、神の創造主としての尊厳、意義はいささかも否定されることはなかった。神はあくまでも祈りと信仰の対象であることにはかわりはない。しかし、ひとたび創造された秩序は創造された瞬間に神の手を離れる。その秩序は人間生活のそれとして超越的でなく現実的に存在するものとなった。神は後退し、信仰と生活の一枚岩が解体し、信仰は信仰、現実の生活は生活として人間の在り方が肯定されるようになる。ここに目的価値の転換が生じるのであるが、それは啓蒙主義の土壤の上でそうなのである。

超越的な神の絶対性によって創造された宇宙の秩序が成立の瞬間に神の手から離れて合理的で理性的な主体である人間の側に委譲されるのであるが、人間が理性的で合理的な主体であるという自信に満ちた人間観は宗教改革の内にはなかった。それはキリスト教的世界観というよりもギリシャ的世界観に立脚するものであった。このギリシャ的世界観を系譜とするルネッサンスとローマ的伝統に立脚する宗教改革の総合の場が啓蒙主義の時代であり、それはデカルト、ベーコンの時代に属するものであった。

啓蒙主義はその世界観においてその中世的な在り方とは決定的に異なる。その相異点についてマルクスが「機械と大工業」において注記しているのが参考になる。

「……デカルトは、彼が動物を単なる機械だと定義するとき、中世とは異なるマニュファクチュア時代の眼で見ているのであって、中世には動物は、後に再びフォン・ハラー氏によりその著『国家科学の復興』でそう看なされたのと同様に、人間の助手と看なされたのである。デカルトがベーコンと同様に、生産の姿態の変化及

2) 矢島『社会科学の危機』春秋社刊、1970年、173-176頁。

び人間による自然の実践的支配を思惟方法の変化だと看したことは彼の『方法序説』をみれば解るのであって、そこには就中つぎのように書いてある、——『(彼が哲学に導き入れた方法によって)生活にとり極めて有用な知識に到達することができるのであり、そして、学校で教えられるかの思弁哲学の代わりにこの知識の実践的応用を見いだすことができるのであって、これにより、我々は、——火・水・空気・星・その他、我々を取り巻く一切の物体の力や作用を、わが手工業者たちの種々の職業と同じように正確に知ることによって、——我々の知識を、その適する一切の用途に同じ仕方で充用することができるであろう。かくして我々は、自然の支配者及び所有者となり』またかくして『人間生活の完成に貢献しうるであろう』と。……経済学に適用されたデカルトの方法は、経済学を、貨幣・商業・などに関する旧来のお伽噺と迷信的な諸表象から解放し始めた、……³⁾

動物を「人間の助手」と見なす視点から「機械」として見なす視点には決定的な移行があるのであって、それは人間が自然を共に手を携えて歩む「相手」から、操作され、支配される対象に変わっていることが理解できる。人間に対して親和的で、その内に人間は抱かれるという自然に対する観念が意のままにならない自然に対する人々の対応であった。その意味では自然は女性的であり、文化が男性的であるという観念は啓蒙期の産物であるということはあながち否定できない話ではある。自然に対するこの新しい態度はなканずくベーコンの“New Philosophy”にその表現を見いだすことができる。ここでは自然は力によって掟伏せられなければならないものであった。我々は「大胆にその背後に廻って、自然のその髪をつかみ(Nature must be taken by the forelock, being bold and caput her)」にしなければならない⁴⁾、これが

ベーコンの主張であった。

ここに啓蒙主義に対するフェミニズムからの批判⁵⁾が理解できるというものである。自然に対する支配がまさにレイピスト的メタフォでもって語られており、そこには対自然に対する態度と対女性に対する態度が同根のものから発していることが理解できる。近代における文化の自然に対する優位、男性の女性に対する優位、このヒエラルキーが啓蒙主義を特徴づけており、近代が押し付ける知と規律はまさにこのヒエラルキーの上に築かれたものである、というのがフェミニズムの批判であり、ポスト・モダンの潮流とフェミニズムとが結び付くのも理解できる。男の女に対する優位、文化の自然に対する優位というヒエラルキーをもった二分割の上に打ち立てられた近代の知への批判へとそれは志向せざるをえないのである。近代の科学を代表する経済学が「労働が富の父であり、自然はその母である」(ベティ)というスローガンを掲げて登場することになるが、それは以上の世界像の表現である。18世紀に入ると魔女裁判が消滅している。中世においては自然は御しがたく、不可解で、悪魔的でさえあった。その自然と女との類縁性が女を魔女に仕立てあげた。その魔女狩りがなくなったということは、自然の統御可能性、女の統制可能性が確立したことを物語っている。

以上のフェミニズムの啓蒙主義に対する批判は基本的には承認できるとはいえ、ベーコンのいう自然に対する態度は管理(manage)という態度を想起させる。この点はプレイバーマンが指摘しているところである⁶⁾。即ち、管理するmanageという動詞は、手を意味するラテン語のmanusから派生したもので、もともと馬の

4) F. Bacon, *The Philosophy of Francis Bacon*, ed. B. Farrington, Liverpool: Liverpool University Press, 129p

5) Susan J. Hekman, *Gender and Knowledge*, Polity Press 1990, 115p.

6) H. プレイヴァマン『労働と独占資本』富沢賢治訳、岩波書店、1978年、74頁。

調教, 馬術 manège を馬に仕込むことを意味したのであって, ベーコンが自然についていることは馬を調教し, 人間の意志に従わせる行為に近いものである。それは管理を通じた統制である。統制(control)こそは管理の中心概念であり, 管理と統制はともに両者を含意しており, 両概念は互換可能でさえある。自然と人間に対する管理と統制という態度を生み出す社会関係が機械とそれに基づく大工業を生み出したのである。それは新しい規律の創造なのである。ちょうど馬が心理学において労働, あるいは労働者のアナロジーにおいてよく促えられるように, その規律が労働に適用されるようになるのに殆ど距離はない。

自然は一方では, ワイルドで御しがたく, 無秩序で混沌としていると同時に他方では, 人々を優しく抱くものでもあった。人間はそうした自然のコンテクストのうちに織り込まれていた。そうした自然から徹底的に距離を取らせたのがベーコンであったといって過言でない。自然は人々に対して対象化されて現れてきたのである。近代的実験科学がしばしば「ベーコン的科学」と呼ばれてきたように, ベーコンによって大規模な実験が唱道された。それは中世における日常的器具の使用による実験とは異なる性格のものであった。熱度計や空気ポンプなどの器具に加えて, 大規模な実験装置が用いられ, 人為的に自然を「拷問」し, そこから特異な自然法則が導出されてくるようになってきた。実験物理学の理論化はそれの数学化をもたらし, 自然は数学化された理念の衣を着けて登場し始めることになる。自然は科学の対象となり, 自然のこの理論的支配はその実践的支配へと転化した。この自然支配には自然法の一つとしての人間も含むものであった。かくして実践はその相貌を変えて現れるようになる。実践を「実験と産業」においたのはエンゲルスであったが, これこそは実践が「卑俗なユグヤの形態」に矮小化されていることがわかる。実践は人々の生活の総体に他ならないのであるが, それが役に立つかど

うか, 自然支配という土台の上でその自然が人間にとって効用的か否かという観点からしか問題にされないのである。

大工業はまさに以上のパラダイムを意味基底, 土台として招来されたのである。このような土台の上で提起される「問い」において機械が登場する。科学革命はその解答ではなく, その「問い」のうちにあるといわれてきたが, そこにおける問題性の移動が決定的なのである。科学の応用である技術の革命もその意味では特殊な問いの内に見られなければならないのである。機械を生み出した人々の生活世界の総体の在り方の変化があるのであって, そこでの人と人, 人と自然との操作, 支配という関係の物象化として機械が登場してくることになる。

1 機械制大工業と合理化過程(=規律の深化)

「マニュファクチュア独自の狭隘な技術的基礎は, 特定の発展度に達するや, それ自身によって創造された生産要求と矛盾するにいたった」⁷⁾

資本の「生産要求」, これが大工業を用意したのであるが, それはいかなるものであろうか。それは, 資本主義的生産が剰余価値を規定的目的, 推進的動機とした商品の生産であることからすれば, 剰余価値の生産であることに論を待たない。資本の要求はできるだけ多くの剰余価値を生産することにある。剰余価値のより多くの生産ということが資本の質的規定である。だが, 一挙に無限大の剰余価値を生産することは不可能である。そこには自ずと量的な限界がある。資本の質的規定とその量的限界という矛盾はその生産の繰り返しによってしか解決されない。生産の連続性, これこそ近代産業資本の一大特徴なのである。連続的な生産に耐えられるように生産が組織されなければならない。

マルクスは1861-3年草稿において労働の資本

7) 『資』I, 609頁。

のもとへの形式的包摂を以下のごとく理解していた。即ち、その生産様式がいかなるものであるかはさておき、労働が資本の生産過程となり、労働諸条件が資本として自立化し、労働者に対立する点に形式的包摂を求めている。その際、資本に形式的に従属している労働過程を「第一に、資本家による労働能力の消費が、それゆえ資本家による監視と指揮とが行われることによって、支配・従属の関係が発展し、第二に、労働のより大きな連続性が発展する」ものと理解していた⁸⁾。この規定は現行の『資本論』では消えているが、資本の生産過程はこの規定によってその全体を貫かれている。資本の規定は支配・従属と生産の連続性をセットとして確立するのであり、資本の概念は生産の連続性を最初から含んで成立している。資本の実質的包摂は生産の連続性が実現される物質的諸条件に結び付いているのである。以下、その点を機械において見ていこう。

機械の構成的契機としての作業機はそもそもから、労働者の手道具を狭小なものたらしめる器官的制限から解放されているのであって、それは人間的・自然的という制限からの解放として登場してくる。発動機構にあってもそれは人間的・自然的の克服を第一義的な課題として登場してきた。動力としての人間は均整で持続的な運動体としては極めて不完全であり、連続的生産に適合的であるにはそれは諸自然力と置き換えられねばならなかった。支配的動力としての水力は、任意に増加してその不足を補うことができず、時として枯渇し、またそれは全く地方的であった。その能力が人間の統制下に立ち、可動的であり移動の手段あるような、都市的で、水車のように田舎的ではないような、生産を田舎に分散させないで、都市に集中することを可能にするような、その技術学的应用が普遍的で地方的事情に制約されないような動力機が登場した。

それは人間的及び自然的地域的制約の克服であった。これは生産地がある特殊な地域に限定されるというマニファクチュアに特徴的な地的分業と決定的に決別するものであった。

自然力の動員、科学の応用、経験的熟練の機械による置き換えは人間的・自然的支配という近代合理主義の開花であった。マニファクチュアの場合は労働者は生産過程に適合させられるが、過程の方も労働者に適合させられている。これが機械体系にあっては労働者は機械の自律的なリズムそのものに適合しなければならず、機械は資本の生産要求にしたがって、発展していった。この機械体系の自立的発展に労働者はとりのこされることになる。マニファクチュアの道具は労働者の手許存在として資本としての自立化をとげてはいないが、機械は資本として自立し労働者から分離し、対立する。機械体系は作業機と作業機を結合し、この結合作業機の群の編成体において、全体過程が連続性において特徴づけられる。自動停止機はそれを体現するものであった。機械は労働手段としてではなく、資本の生産要求に従って発展してきたのである。

機械の複雑性、多様性、規則正しさの増大、これは生産の連続性を内包した生産過程の弾力性と膨張力の飛躍的發展として現れた。生産は「生産のための生産」として特殊なものとして現れ、生活世界の一要素として組み込まれても、その生活世界から分離することになる。資本主義的生産様式が機械を土台にして確立される。

この生産体制が維持されるにはそれに適合的な人間が形成されなければならない。労働の規則性、斉一性、秩序、継続性、精力の高まり、これらに適合するべく規律が創造される。機械体系の斉一性への技術的隷属と労働体の独自の編成とは規律を生みだし、この規律は発達して工場体制となる。そうしてそこでの労働者の編成は階層的体制(産業下士官と産業兵卒への労働者分割)が生む。それは官僚制への萌芽であ

8) マルクス『資本論草稿集』9、「1861-3年草稿」IV大月書店、1994年、386頁。

る。すなわち、それは徹底的に合理化された行為としての規律の体系として近代官僚制の萌芽をなす。それは規律の規則化、行為規範の規則化として現れ、規則にしたがった合理的支配の可能性を作り出す。資本機能(支配・強制、指揮・指導)を体現する機構としての資本の権力は工場体制として工場全体に浸透している規律の具象化なのである。かくして生産の相貌が変化する。それは生産から規則に従った規律として現れる。資本主義の合理化過程は規律の深化として現れる。

規律とは、殆ど自動バネのごとく反応する人間の行為であって、それは受けた命令を計画的に精確に養成された通りに無反省かつ無抵抗で遂行するよう訓練を受けた行為であり、習慣化されたものである。自己の行為が何であるのかを反省するまえに自明なこととして行為してしまっており、恣意的要素が介入する余地のない徹底的に合理化された行為がそこにある。それは集団的には画一性としてあらわれる。この画一性からはずれ、規律に対して距離をとる者が現れるとすれば、当の人間は異和感をもたれ、規律を乱す異端者と見なされることになる。ここで労働者によって理解される事態は全体状況に自己を位置付けた理解ではなく、殆ど慣習化され、自動化された理解で、それは「そうなのだから、そうなのだ」という伝統的行為における理解に近づく。合理化の徹底はウエーバーによって非合理的とされた行為に限りなく近づく。合理性は非合理性に支えられる。

標準労働日の制定によって労働日の制限という社会的な合理的規制が開始されるや資本は徹底的に労働の強度を追及する。機械は強度を増大する方向で改良され、その過程は規律の深化となる。かくして規律を受肉した「機械労働者」という独自の一階級が登場する。これこそはマルクスの経済学批判の隠れた主役であり、歴史の意味を担っていく存在なのである。労働者の特質に規律を見いだすのはほとんどないことである。それはなんら生得のものではなく、労働者のうち

のうちに外から刻み込まれたものなのである。

資本主義的生産様式が支配的となるには当の規律が社会全体に普及されなければならない。規律という独自の行為様式は工場だけで支えられるものではない。社会全体にその規律が普及することによってそれは保障される。ヘゲモニーは工場から始まるのである。資本主義的生産様式はこの規律を労働者に受容させるばかりか、それを再生産する特殊な装置をその生産様式の内組み込むのである。規律が維持されるその機制を見てみよう。

I. 機械が作り出した社会的状況そのものが機械が要請する規律を労働者に受容させる。機械制大工業は新たな労働力として婦人・児童労働を作り出す。安価で柔順な労働力の存在はそれまでなお存在していた抵抗をくじくことになる。それは劣位な労働力を作りだし、そこに犠牲を転化させるというメカニズムに基づくものである。新たに付け加えられた搾取材料たる婦人・児童には自然発生的無知とは異なる人為的に作り出された知的荒廃と精神的萎縮によって構造的な格差が押し付けられることになる。生産の場において抑圧の中の抑圧が作り出されることによって、即ち、非合理的要素が作り出されることによって合理性が実現されるのである。即ち、機械労働者という独自の一階級の規律が維持される。規律は以上の社会的、匿名的圧力によって内面化され、受容される。

ところで、以上の独自の機械労働者の内部においても非合理的要素が作りだされる。近代的な機械体系のもとで廃棄されたはずの分業が復活する。機械制大工業は労働の平準化、均等化、単純化によってその労働はだれにも遂行可能なものとなり、そこから仕事上の秘技、神秘的なこつというものは徹底的に排除される傾向をもつ。かくして労働は全面的に可動的となる。にもかかわらず、細分化された労働に労働者は固定化される。旧式分業の復活のようにみえるが、

それ自体、近代的産物である。機械は労働者そのものを児童のときから部分機械の部分に転化させるために利用される。かくしてこれはこれで労働者自身の再生産に必要な費用を著しく減少させる。

労働者を部分労働に固定化させることによって賃金を低下させる点に分業の効用を見いだしたのはバベッジであるが、このバベッジ原理の適用もさることながら、この分業の適用は工場全体への、つまり資本への労働者の心細い依存を完成させる。より単純化された部分労働への生涯的な固定化はそれ以外の生活の仕方がありえないことを意味し、資本に依存する外なくなるのである。バベッジ原理は賃金低下をもたらすだけではない。それは労働市場に反作用し、労働市場の中に低級な不安定な労働を供給する労働市場を作りだし、労働市場そのものが資本家にバベッジ原理を採用することを強制する。これらの社会装置は旧式分業の残存ではなく、近代を特徴づける規律を維持する新たな創出物である。

機械制大工業のもとでの分業の再版はかつての分業と決定的に異なる。マニュファクチュアのもとでは、労働者は長い修業時代を必要とされた。イギリスでは7年間の徒弟期間を規定した徒弟法がマニュファクチュア時代の終わりまで有効であった。それが無用な場合であっても労働者達の嫉妬によってそれが維持されたのである。それが労働者に規律を科すことができない事情でもあった。それ以上に問題であったのは、マニュファクチュアは短命であって、労働者の移出入につれてある地方からある地方へとその所在地を移さなければならなかったのである。機械制大工業は分業のおかげで、労働者を工場体制に定着させ、それに必要な規律を取得させるのである。

以上の事態は新しい生産体制の内に旧式のものが挿入されたものであるとすれば、古いものはその内容を根本的に新しくされて機械制大工業に接合される。かつての家内工業は名称以外

には共通することのない大工業の外業部として見えない糸によって接合されていた。また、マニュファクチュアは近代的マニュファクチュアとして再編される。排他的でかつ等級化された部分労働に固定化された労働が可動的な簡単労働となり、大工業の生み出した規律を持ち、しかもより劣悪な労働条件のもとで労働する労働者の編成体としてそれは接合される。ここには新しいもののうちに古いものが、古いものの内に新しいものが内容となり、過程全体を支えるという弁証法が貫徹する。規律の深化には弁証法的ドラマがある。

II. 機械制大工業は都市への生産手段と労働力の集積、集中を進める。機械の構成的契機である動力機において示唆されたように、機械は工場の立地が都市的であるような可動性、移動性を特質としていた。そうした地域的自然の特殊性を機械は克服するものであった。農村における資本蓄積は独自の人口法則を展開する。すなわち、農業における生産様式の変革と資本蓄積とは労働者の絶対的減少を伴い、膨大な労働者人口が過剰化し、都市にそれが大量的に流入してくる。それが都市労働者への匿名的圧力として機能することになる。資本と労働が都市に系統的に移動するが、機械制大工業は農村を系統的に収奪し、植民地化するものとなる。

III. 資本の生産要求は生産の連続性にあった。この連続的生産の地平の下で、資本は予測可能な事態を作り出そうとする。即ち、不規則な労働、労働力の不安定性は計算不可能な操業として現れる。産業循環、各生産部門における特殊な事情に支配される市場とは別に、季節的変動と突発的な注文にさらされる生産がある。交通、通信の発達に短期注文の習慣を増大させる。繁忙と閑散の混合する労働の不規則性は労働力の浪費となり、それは労働力破壊をもたらす。この労働量を一年中に渡って均等に配分させるには、労働日の取り締まりが必要となってくる。

標準労働日という社会的な合理的規制(計画—合理性)は不規則的な生産と衝突する。この衝突を解決するものこそ市場の拡大である。生産の規則性、恒常性はその生産が世界市場に立脚することによって初めて可能となる。その他のいかんともしがたい一切の事情は、建物の拡張、機械の追加、同時に作業する労働者の増加、卸売商業制度への介入によって克服される。社会的な合理的規制が資本自身の合理的経営(市場—合理性)とその活動範囲を拡大する。規律が社会的に普及する。だが、資本は労働日の強制的な取り締まりによってのみそのことを事後的に納得するのである。それまではその規制に頑強に抵抗するというパラドックスを演じるのである。

機械性大工業はその確立とともに原料と市場によってのみ制限される突発的拡張能力を獲得し、世界市場を創造した。非資本主義圏が原料供給国と市場に強制的に転化され、工業国の合理化過程を支えるものにされる。国家による社会的合理的規制を資本が受け入れるのはそれが他で埋めあわせることができるか、それがすべての資本に均等に課せられる時のみであった。労働日延長と労働の強度の増大は反比例する関係にあり、標準労働日の制定は強度の増大を促進する。それは強度の増大によって補償することは当初は不可能とされていたが、それは超過達成される。機械の改良は強度の増大を実現のために追及されるようになる。それは生産の斉一性、秩序、精力の高まりとして現れ、生産の連続性、弾力性の発展は生産を一層世界市場に依存させる。

標準労働日の制定は当の工業国の労働者はともかくとして周辺諸国の民衆には新たな文明化された野蛮が接ぎ木されることになる。規律を内化した生産のリズムに周辺諸国は編入される。そうした諸国には奴隷制に基づくプランテーション経営、寄生的地主性、再版農奴制が創出される。これらは等しく近代工業の産物である。中心国における合理化過程、規律の深化には周

辺諸国における非合理的要素が随伴することになる。中心国は自己の合理化過程を維持するためにはその内外を植民地化する。そうした埋め合わせによって中心国の労働者が闘いとった資本家階級からの妥協はその転嫁構造を生み出していくのである。工業国における社会的合理的規制は当該国の資本の価値増殖を制限するかにみえる。しかし、資本はその代償メカニズムを生み出し、かえって円滑で大規模な価値増殖の諸条件を生み出したのである。機械制大工業が周辺諸国をその大工業の持つ規律的生产によって作り出された世界市場に組み込まれて行く事態を我々は単純に資本の文明化作用というわけにはいかない。もし、それを文明化というとなれば、近代の生み出した規律を文明というに等しいであろう。

我々は社会的生産過程の自然発生的姿態に対する社会の意識的で計画的な反作用の持つパラドックスをみてきた。この過程は決して実証主義的史観がするような線形的で自動的な過程ではない。それは機械的な量的な発展の問題ではなく、階級の歴史的行為に媒介されなければならなかった。だが、それが新たな抑圧を生むという矛盾に満ちた過程でもあった。社会的な合理的処理、即ち計画—合理性は労働者階級の階級闘争という歴史的行為なしには実現されえないのである。

「近代資本主義社会の発展につれて目的合理性は次第に個人レベルから集合体レベルの嚮導原理として個人レベルの目的合理性を制御するようになる。つまり目的合理性はシステム化されることによって組織化の基本原則となる」⁹⁾

個人レベルの目的合理性、従って利害関係に基づく合理性(市場—合理性)が相互に影響しあって社会全体が目的合理的行為を担っていくと

9) 佐藤慶幸『ウェーバーからハバーマスへ』世界書院、1986年、79—80頁。

いうふうに現実の歴史が目的論的に構成されているわけではない。即ち。合理化過程を合理性の成長論として線形的な過程として描くことはできないのである。標準労働日の問題は本来、資本家階級と労働者階級の対立を国家が市民対市民、権利対権利(ブルジョワ社会では階級間の対立、軋轢は対等平等な市民相互の問題としてしか現れないし、そのようにしか表現しえない)として処理し、それを調停、和解、仲裁という形式で裁決するものである。したがって、確定される標準労働日の水準の背後には階級相互の力関係が表現されている。

放置すれば資本の機能不全となる事態を標準労働日という制度を作り、階級間の対立をその制度内の問題(10時間法を9時間法にという運動)に転化させるという「大きな政治を小さな政治にかえる大きな政治」(グラムシ)がそこで行なわれているのである。国家はそうした妥協、譲歩を通じて、階級対立を宥和し、民衆を国家の内に統合し、国民国家としてのまとまりを構成していく。そのことを通じて国民国家を見通し可能な情況にしていくのである。これ自体、国民経済レベルの合理化過程なのである。計画—合理性、社会的合理的規制の水準はその意味では民衆の能動性(又は受動性)の関数である。

民衆が再び受動的となれば、民衆が闘いとった合理的規制は再び奪い取られるという反動が生じることになる。そういう場合は後発の資本主義が猛烈なキャッチ・アップをしているときである。労働者に政治経済的諸権利を妥協、譲歩を通じて与えた先発の国民経済は老大国として現れる。個別資本相互の競争と異なって、国民経済相互の競争はいずれが耐乏生活にたえることができるかにかかっている。社会的合理的規制の実現は一国のレベルでは考えることのできないパースペクティブをもって提起されているのである。

2 物象化過程と合理化過程

カール・ポランニーは経済を実体および形式の両面から定義し、前者を人と自然との物質代謝の過程とし、後者を目的—手段関係における手段の選択におく。我々論理の流れからすれば経済の形式的意義としてのポランニーの新古典派的な経済の把握が問題となる。それは利害関係における目的合理的行為において最適な手段を選択するという市場—合理性の立場であった。だとすれば、資本のもとに実質的に包摂された労働者は経済的行為をしていないことになる。労働者にとって生産の仕方には殆ど選択の余地がないのであって、その作業の在り方は資本の権力に委ねられている。そのようにしてもらうことを選択したのだという屁理屈をもってすれば、泥棒に銃を突き付けられて金を出すのも合理的選択だ、ということになる。

目的実現にとっての手段の選択というのが経済であるとすれば、経済的行為をおこなっているのは資本家だけだということになる。その意味では合理性というのは資本家にのみ意味のあるものとなる。労働者が生産において経済的行為をしていないとすれば、労働も経済的カテゴリーではなくなる。労働は一般的に目的合理的行為を代表するものと考えられているが、それがここでは否定される。これはこれで一貫した認識ではある。他人の労働を支配するものだけが、労働力と他の生産要素とをあえて混同する。彼にとってはその区別はどうでもよいことであるが、他人の労働を使用することなく自ら労働しなければならない者にとってはその区別は決定的である。

労働者が経済的行為をしているのは消費者として市場に登場する場合に限られる。そこでは限られた収入でもって、絶えず選択をおこなっているのである。そのパラダイムを人間を消費、欲求の主体とする経済学にあては経済がそのように現れるのはけだし当然であろう。とはいえ市場において人はそのように本当に合理的な

選択をしているのであろうか。この合理的選択には「ナップ・ザック理論」なるものが陰のごとくつきまとっている。ある買い物において、様々な選択の余地ある諸商品の組み合わせを買い入れるとき、その商品の数が増えれば増える程、その組み合わせは増大し、その計算にはコンピューターを用いても数年かかったりする。そんな計算を人はしているのであろうか。これは社会主義における経済計算の不可能性を主張するときにも用いられているものである。値段が同じでメーカーの異なる商品を前にして人は確かにその選択に迷うが、それに多大な時間を一日24時間しかない内から本当に振り分けているのだろうか。それこそ合理的選択における非合理性であらう。

「ブリダンのロバ」

砂漠の中で、飢えたロバに餌を別々のところに等距離の所に置いたとき、ロバはそのいずれを選択するかで悩み、飢えて死んでしまうというフランスの哲学者ブリダンの逸話がある。この逸話に基づいて犬に同じような刺激を同時に与えると犬は激しい混乱に陥り、ノイローゼ状態になることが実験によって得られている。人間の場合にはこのような葛藤を人間にのみ固有な仕方では解決することをロシア心理学の異才、ヴィゴツキーが「意志のパラドックス」として示した。選択される文脈を困難にし、その選択の時間を短縮された子どもがサイコロ、くじでもって自分の行動を決定することの許可を実験者に申し出ることを彼は確認している¹⁰⁾。

それは葛藤状況から抜け出す人間にのみ固有な行動決定なのである。それは選択を迫られる葛藤状況の中にニュートラルな刺激を持ち込み、それに決定を委ねるというやり方なのである。我々はコインを投げてその裏表で自己の行為を選択したりする。よくあることであるが、我々は人と待ち合わせている時にその人が約束の時

間に来ない時、帰ろうか、もう少し待とうかと悩む。「あの時計が6時30分を指したら帰ろう」というように、時計に委ねるのもそれである。ふとんから抜け出すのに「1,2,3」でおきたりする。

意志はその都度の状況に応じて人口的な条件反射を作り出す。徹底的に主体的意志が貫かれているはずの目的合理的行為のうちにそのようなモメントが含まれているということには近代合理主義には納得がいかないことであらう。だが、人間の意志の自由には非意図的なメカニズムを作り出し、行為がそれに媒介されることを含んでいる。ここに意志の自由のパラドックスがある。この意志のパラドックスに基づくことによって人は調和のとれた生活を組織することができるのである。合理性に反することによって合理性が貫かれるのである。生活において、この意志のパラドックスは人が自己及び他人の行動を操作するために媒介的機能を営む中間項としての手段を作り出すものとして現れる。対自然、対人間関係においてそれは道具、記号として機能する。

人間を消費、欲求の主体とする経済学からは、労働は経済という領域から追放される。だが、我々は労働をその契機とする生産こそ経済の領域を構成すると考える。その労働の場に再び光りを当ててみよう。人は労働の場において対象との間に中間項を設定し、媒介的活動をおこなう。中間項たる道具との関係においてどのように行為すべきかという葛藤状況が短縮されればされるほど、それに従う行為は迅速になる。行為主体の判断、反省が介在する余地がなくなり、中間項に反射的に反応すればするほど、労働はスピード・アップする。労働は合目的的活動として目的合理的活動の典型例として従来解釈されてきた。それには徹底的に意志が貫かれたものとみなされてきた。中間項としての道具の介在はそれに労働様式を適合させ、主体の意志を道具に委ねるという主体の委譲を意味する。どのように振る舞うべきかという葛藤状況にいる

10) エリ・エス・ヴィゴツキー『精神発達理論』第二章
10「ブリダンのロバ」参照、明治図書、94頁。

かぎり、主体は保持されている。徹頭徹尾主体が貫かれているとされている目的合理的行為にはそのよう逆説が含まれていることが理解されていなければならない。

人は人為的な中間項を作り出し、それに従うという時にそれは自己がなしうような行為がそこで選ばれているのである。人は自分が解決しうる課題のみを自己に課す。課題の提起はそれを実現するための条件と結び付いているのであり、課題をその実現のための条件によって媒介された情況に置くことでもある。人為的に作り出された条件に反応する場合に、なんらかの信号がくるという予期がそこにある。行動への意志、動機には、その予期に対して反応することが組み込まれている。即ち、何等かの反応をするように自己を組織し、その反応に移れるような意識態勢に自己を置くということが以上のことを意味する。道具に関わる自己はその道具に主体の委譲をおこなっているのであるが、そのことを知っている自己がいるのである。この道具に関わる行為を包括したメタ構造がそこにあるのであり、人はそのメタ構造の主体として現れることになる。そこにおいて、このメタ構造への知識が道具に蓄積され、道具の発展として現われる。すなわち生産の結果を先取りし、その結果を導くような手段が作られ、過程に適合する知識は手段に蓄積される。従って、対象の加工という作業はますます手段との関わりとして現れ、対象との距離は遠くなり、それは「ここ」と「いま」を乗り越えていく。なまの対象に直接関わるのではなく、それは媒介されたものとして現われてくる。それは対象に対する同化ではなく、道具への同化として現われる。

機械体系の資本としての自立化とはそうした意志のパラドックスを徹底的に利用するものである。マニファクチュアにおける手道具としての資本としての非自立化は労働者の労働の意志決定において意志が介在する余地がそこに充分あるからである。人と人との関係が物に媒介される生産関係は資本のもとではどのように現

れるであろうか。資本関係は生産手段としてのものに媒介され、労働者は資本家によって中間項として挿入された物に従うようになる。自動的機械体系が資本のもとにやってくれば、それが完成される。労働者はメタ構造の主体ではなくなり、そこに資本家がやってくる。労働は生産過程の総体というメタ構造のうちで機械にのみ従属するものとなる。

「生産過程は、労働が労働過程を支配する統一としてこの過程を包摂するという意味での労働過程ではなくなっている」¹¹⁾

労働者は機械のリズムにのみ従うという受動性が要求される。労働者はそれに従って行為するという事に集中しなければならず、それは受動的であることに主体的でなければならないということになる。それが規律というものである。かつては労働は「労働過程を支配する統一としてこの過程を包摂」するものであった。即ち、労働の担い手としての労働者はその意味でメタ構造の主体であった。その労働と資本が交代するのである。

資本関係は支配・強制という関係と指揮・指導という関係の両面を持つが、まず、前者の支配・強制という側面が物に託され、それが、労働者の労働を支配し、強制するものとして現れる。他方、指揮・指導という側面は集団労働の不可欠の要素であり、生産条件の一要素となったものである。この集団労働の調和、連絡、媒介の手段として生産手段としての物が機能するようになる。それは機械体系において完成するのであるが、機械体系において労働者の生産過程における編成は技術的必然として客体的に編成される。労働者の集団としての編成が機械を媒介にして行われるようになり、労働者の集団の構成力が資本の力(Macht)として自立化する。資本家と労働者、労働者と労働者との関係が機械体系に媒介されるという以上の事態が資本のもとへの労働の形式的、かつ実質的包摂なのであり、

11) 『資本論草稿集』2「1857-8年草稿」II, 443頁。

ヒトとヒトとの関係がモノに委譲される事態が資本関係の物象化なのである。合理化過程はマルクスにあっては資本のもとへの労働の実質的包摂としてあらわれるのである。

そのもとでは労働者は受動的であることに徹底的に主体的であらねばならなかった。モノであると同時に人であらねばならぬという不思議な存在とされる。そうした存在と化するには労働者を自生的過程に委ねるわけにはいかなかった。

機械の資本としての自立化は労働者の労働を機械に徹底的に依存させる。そこでは労働者の意志が介在することのない、自動バネのごとく反応する人間の行為が徹底的に要求されることになる。計画的に訓練され、一切の自己の行為の在り方の反省を排除する合理化された行為形式は、そうした仕方で行うことに内面的志向を集中させることを徹底的に要求する。規律は科学、技術が発展すればするほど貫徹する。技術の発展、従って、科学の発展は資本のもとでは規律の深化と結び付いており、規律の深化の方向で技術は発展し、また規律に人間は適合するように訓練、訓育される。disciplineは学問領域、規律、訓練という意義をもっているが、合理化過程は科学、規律、訓練を三位一体としている。近代資本主義はその生成を以上の三位一体の発展過程としてきた。

《学問領域＝知、規律、訓練、懲罰、修業》が有機的に結び付き、ディシプリンとして近代を用意した。権力は一極に集中されるものではなく、それは社会に広く分散して存在するというフーコの言説はこの点に収斂している¹²⁾。知と権力はディシプリンを媒介するものであった。近代を用意するものとしての新しい科学の誕生は規律の創出に結びついており、それは自由主義的人間主義の相貌を持ちつつ、現実には統制された労働を創出するテクノロジーとしての知であった。西欧における産業化と同時に生まれた様々な学問領域(discipline)即ち、刑罰

学、心理学、臨床医学、生命医学は人間の振る舞いを統制する啓蒙された改良主義の外貌の背後で規律の創出に奉仕した¹³⁾。

18世紀の新しさは、規律、訓練、懲罰、修業が組み立てられ、一般化され、知の形成と権力の増大がある円環的過程によって規則正しく強化しあうという段階を形成した点にある。この点から堰を切って規律、訓練が広く普及していった。最初に病院、ついで学校に、後に工場にと、あらゆる客体化のメカニズムも服従化の装置にそこで転化していった。それらは人間に規律を与える手段として機能し、個人を形成し、統制するものであった。この合理化過程＝規律の深化からはみ出すもの、それに適応しえない離反は異端、狂気として隔離され(『狂気の歴史』)、施療院には貧者が閉じ込められた(『臨床医学の誕生』)。貧者が経済的現象となって以来、狂人のみが隔離の対象として特別の扱いを必要とされた。彼らは住民の内に戻ることのできない非生産的成員であったからである。

近代の産業とりわけ織物業は監獄、救貧院、孤児院と結び付いていないような地方には存在していなかった。法的強制と工場内の疑似法制的懲罰体系とは町全体を包括した社会制度であった。隔離された工業地域における企業には医師、牧師、教師が専任として勤めており、そこには企業独自の救貧、年金、葬儀制度があり、教訓を垂れ、訓戒する者が労働者を含めた町全体の住民の精神的生活を支配していた¹⁴⁾。

規律が社会総体に浸透していくことによって、規律をその内に組み込んだものが合理性となり、その合理性は正常と異常の区別を打ち立てる基準となり、規律をそのうちにもった合理性が規範となりそれが客観化され、それは国家の正当化原理となり、それは体制として確立される。工場体制こそは規律の体制であったが、それは国家の体制になるのである。かくして人は何をいかにすべきか訓育され、規律を自己の規定

12) M. フーコー『監獄の誕生』田村訳、新潮社、1977年、224頁。

13) 同上、24頁。

14) H. プレイヴァマン、前掲、73頁。

の一部として持つようになる。これが合理化(=進歩?)なのである。

規律を内面化するとは、思考を停止し、主体を喪失することである。それが合理化なのである。主体を喪失している人間を主体であるとして賞揚するヒューマニズムほど愚かしいものはない。

3 資本主義的市場と生産の連続性

我々はつとに生産の在り方が市場の在り方を規定するということを述べてきた。生産様式がそれに照応する交易諸関係を作りだしたのである。そこでの生産の独自性を生産の連続性においてみてきた。これこそ資本制的市場の独自の在り方を規定するものである。それがどのように規定するのであろうか。この生産の連続性が実現される経済的諸形態を考察することによって、以上の課題を遂行するとともに、そこにいかに合理化過程=規律の深化が貫徹するのかをみていこう。

①資本の三循環の統一と生産の連続性

資本はその三循環の並行運動によって生産の連続性を実現する。

貨幣資本循環： $G-W \cdots P \cdots W-G$

生産資本循環： $P \cdots W-G-W \cdots G$

商品資本循環： $W-G-W \cdots P \cdots W$

資本はその姿態変換の継起的移行と以上の三循環の並行運動において資本の流過程を形成する。資本は購買をおこなっている時に生産を行い、生産を行っていき時に販売を行う。三循環の並行運動と資本の継起的移行は相互に媒介しあう。並行が継起を、継起が並行を媒介することによって、生産の連続性を実現される。この生産の連続性が販売と購買とからなる流過程の恒常性、連続性を保障する。以上の並行運動による生産の連続性の実現のためには、資本分割が必要となる。そのためには一定額の貨幣資本を自由にしうるだけの資本規模に達してい

なければならない、それは最低必要資本量の増大となって現れる。それは貨幣資本に余裕のある資本にのみ生産の連続性が保障されるということの意味する。生産の連続性を実現するような恒常的体制が維持されなければならないような所で始めて経営という観念が定着し、この恒常的体制に適合する労働者がそこに定着する。そこに始めて産業(industry)が勤勉(industry)と同義となるような規律が確立される。

市場は購買 $G-W$ 、販売 $W-G$ の場であるが、それが連続的生産という形態規定性を受け取った生産によって支えられる。市場は生産の在り方によって規定されるのであるが、資本主義的市場は単なる市場ではなく、連続的な生産をその基礎、土台に持つ。

②資本の回転運動と生産の連続性

三循環の統一によって実現される生産の連続性は資本の回転運動という視点からみれば、それはあらたな規定を受け取る。資本の運動を回転運動においてみるならば、それは固定資本という土台の上に連続的機動力としての流動資本の連続的投下として現れ、この形態を通じて生産の連続性を実現される。資本の回転期間には生産期間と流通期間があるが、この流通期間において生産が中断するならば、固定資本が遊休することになる。生産の連続性の必要性はこの固定資本の遊休の回避という形態で感知されるようになる。流動資本の流通期間への資本投下のためには、それだけの貨幣資本が保有されていなければならない。例えば、生産期間が4週間、流通期間が2週間で、毎週1千万円の流動資本の投下必要であったとすれば、生産期間のために4千万円、流通期間のために2千万円必要となる。この流通期間のための貨幣資本は生産の連続性の維持のために拘束されているのであって、他のものに使用することはできない。資本の三循環の並行運動と資本の姿態変換の継起的移行を保障するための資本分割は貨幣資本を流通期間のためにも振り分けなければならない

いものとして現象する。

流通のために確保されていなければならないこの貨幣資本は独特の運動を展開する。流通期間は不変ではなく、生産期間のように技術的に予測可能でもない。それは絶えず変動する。この流通期間の変動に応じて貨幣資本が遊離・拘束という運動を展開する。それが短縮すれば貨幣資本が余り、再生産過程から遊離し、長期化すれば再生産過程に引き込まれ、流通期間のために拘束される。流通期間はその物質的土台を生産地からの市場の距離としている。市場が飽和化すれば、より遠隔地を求めて商品が輸送される。流通期間はそれだけ長期化する。それに加えて景気の不況が付けくわわる。流通期間の長期化が進み、そのための貨幣資本に不足が来せば、生産の連続性を中断するか、それとも生産の連続性を維持するために、貨幣資本の投下を減少させ、生産の規模の縮小を図るかのいずれかが取られる。資本は基本的に後者の立場をとる。即ち、生産の連続性の維持という立場を優先させるのである。かくして市場の恒常性が維持されることになる。

流通期間の存在はその内に価値変動が生じる余地があることを意味する。流通期間の長期化(それは生産が世界市場に依存する傾向となるということと同義であるが)はそれだけ価値変動の生じる余地を増大させる。生産諸条件の価値変動を流動資本の投下量を変動させ、それは流通期間の変動と同じく、貨幣資本の遊離・拘束という運動を惹起する。それはさらに貨幣資本の所有をそれだけ条件づける。流通期間の変動と価値変動に耐え、生産の連続性を保障できない資本はいわゆる運転資金という貨幣資本の不足に悩まされ、それは綱渡り的な経営となる。そうした資本の多くは淘汰され、連続的な生産の上に打ち立てられた資本が生き残ることになる。それは規律の深化の過程でもある。

流通期間の変動、価値変動それらは反対方向への変動によって相殺されるというメカニズムを貫徹することになるが、この変動過程が貨幣

資本の保有とその投下によって吸収されることになる。市場の変動に弾力的に耐えぬけるように市場は資本は鍛え、そうした連続的過程に耐えぬけるように資本は労働者を鍛える。そうした過程に耐えぬける労働者をその選抜において確保しうる資本とそこからの残余の労働者に甘んじなければならない資本とに資本の二極分解が生じる。それは労働市場の分割の傾向となる。

以上の貨幣資本は準備金という規定性を受け取る。準備金の確保は生産全体への予測可能性、見通し可能性を作り出す努力であり、それは合理化過程をなすものである。そうした合理化過程を担っていけるのはしっかりとした資本についてのみであることである。そうした資本が進める流過程の生産過程への接合という全体過程の組織化はそれが出来ない資本を自己に従属させ、依存させることになる。さもなくば、そうした組織化の間隙の中で活動することによって、小資本は自己の自立性を保持するが、そこに小資本が群がることによって競争を激化させ、それが小資本のもとでの労働者への規律＝訓育となる。自由競争の資本主義、産業資本主義として特徴づけられた資本主義段階の再生産過程の軌道は以上のしっかりとした資本によって設定されるのである。

大資本が社会的再生産の軌道を設定するとは次ぎの点にある。大資本と小資本とでは資本蓄積において大資本がまず一般的に有利である。それは最低必要資本量の存在がそのことを条件づける。最低必要資本量は技術的必然において規定される。シルバーストーン生産函数が指示しているように、ある技術のもとで、ある限界までは規模が大きくなればなるほどコストが低下する。その限界のところにおける生産規模が最低必要資本量となる。それ以下の規模では競争は不利となる。技術の変革が生じれば、その最低の規模は拡大される。こうした条件のもとでの競争において、工場の規模拡大においてそうした最低必要資本量が蓄積されなければならないが、小資本が蓄積をおこなっている間に大

資本はその蓄積を完了させ、新たな工場が稼働し、価値増殖の規模をさらに拡大させているのである。蓄積は利潤率に比例してではなく、その規模、既得の地位、重さに比例して進む。この「重力の法則」に従って進む蓄積は一般的には大資本に有利となるが、それは生産条件の価値変動によって加速される。とりわけその騰貴はコストの増大となる。それは大資本にも小資本にもそのコストの増大は影響するが、それは逆累進的に小資本に作用する。こうした時には大資本と小資本とではその生産活動においてますますその格差が拡大する。

大資本の進める合理化過程が社会的再生産の軌道を設定し、その上を諸資本の競争、利害の対立が展開する。資本が準備金によって流通期間の変動、価値変動を吸収するといってもすべてそれで解決されるわけではない。資本の蓄積衝動は以上の合理化過程を乗り越えて進む。それは解決しがたい流通期間の変動、価値(価格)変動を引き起こす。それが恐慌である。市場において商品の販売不能とその停滞という資本主義経済における恐慌、不況は生産の連続性の中断、同一規模での生産の更新の攪乱という形態をとって現れることになる。資本主義には恐慌、不況というものがつきものであるとはいえ、生産の連続性を土台にした市場の意義は崩壊前(その惰性は今日も続いているが)のソ連、東欧の社会主義における市場と対比すれば十分理解できるというものである。

連続的生産が確立され、その供給体制が弾力的であれば、行列などができるはずがない。勿論、連続的生産が確立していても、その販売が限定的で、先着順ということになれば、行列は当然できる。連続的生産を実現する生産体制とそれに適合する労働者が不在のところでは、いつ次ぎの商品が供給されるのか予測不可能となり、それが市場に登場する時には必然的に行列ができることになる。原材料、部品の供給の遅滞は生産の連続性によってのみ克服される。従って、生産の連続性は生産の連続性によっての

み保障されることになり、それが市場の恒常的体制を保障することになる。規律の深化をもった合理化過程を経験せず、それを実現しえなかった社会主義の払ったコストが行列であり、それは社会主義の正当性への信念を絶えず掘り崩し、腐食させていった。

③社会的再生産と生産の連続性

社会的総資本の再生産は社会的総生産物の流通によって媒介される。それは雑多な流通のよせあつめのようにみえるが、それは隠され、構造化された流通水路をもつものであった。混沌とした過程の内に必然的に従わなければならない過程が隠されていた。その総生産物の流通は三大支点から構成されていた。これはマルクスの再生産論を知っているものには常識に類するものであるが、これは画期的な発見にほかならない。商品交換とは別の次元における社会的交換(文化人類学が対象とする女性の交換、あるいはクラ交換など)において見いだされる隠され、構造化された規則、法則性の発見に匹敵するものなのである。図Ⅰの図解からそれを以下、ごく整理することができる。それを我々はさしあたり単純再生産において考察しよう。

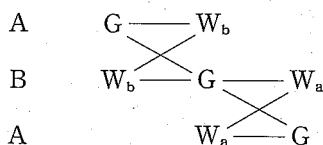
図Ⅰ

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{I} \quad \boxed{C_1} + \boxed{V_1 + M_1} = W_1 \\ \text{II} \quad \boxed{C_2} + \boxed{V_2 + M_2} = W_2 \end{array} \right.$$

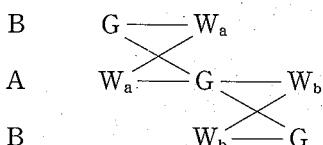
社会的総生産物の三大流通支点

- ① Cの流通。生産手段生産部門内部の流通
- ② V+MとCの流通。生産手段生産部門と消費手段生産部門の部門間流通
- ③ V+Mの流通。消費手段生産部門内部の流通

図II



又は



マルクスにおいて画期的なのは以上の三大流通における貨幣流通による媒介¹⁵⁾である。その点をC₁の内部流通において見てみよう。C₁がW_aとW_bからなっているものとしよう。即ち、AはW_aを生産するのにW_bを必要とし、BはW_bを生産するのにW_aを必要とするといことである。それぞれ自己の消費した生産手段を補填するという問題であり、それは商品による商品の補填、資本と資本との交換の過程に外ならない。

まず、AはW_aを販売しようとし、BはW_bを販売しようとして市場において対面することになる。両者は相手が購買してくれるであろうと待ち構えている限りでは、両者はたちすくんでいるだけで、いつまでたっても商品は売れないことになる。したがっていずれかが動き、機序を与えなければならない。Aがまず購買者となった場合、図IIで図解したように、Aが支出した貨幣は過程を媒介すれば出発点Aに還流してくる(出発点への貨幣の還流法則)。この場合、商品流通に必要な貨幣はAが負担したのであって、Bはその負担から免れており、明らかにBはAよりも得をしたことになる。Bはさもなくば、負担したであろう貨幣を他の事業に流用することができたかもしれないからである。AはBに出し抜かれたということであれば、Aはそれを

Bに期待することになる。だが、誰かがその貨幣を負担しなければならないという問題は残るのであって、誰かが負担しなければならないとすれば、それは誰も負担しないということになる。結局、商品を前にして立ちすくむという出発点に戻ることになる。

にも関わらず商品は流通している。ということとはそうした負担があるにも関わらず負担を強いる事情がそこにあるということである。それがAに妥当するということはBにも妥当することである。それは何よりも生産の連続性を維持する点にある。Aは自己の商品が販売されるの待っていれば、そこに流通期間が介在することになり、生産が中断することになる。従って、Aは自己の商品が実現されることを予想し、その販売を先取りし、「売る前に買う」ことを行ったのである。この生産の連続性はBにも妥当する。従って、再生産に携わる資本家はこの「売る前に買う」ことを可能にする貨幣を持っていなければならない。この貨幣こそは、先に見た流通期間に拘束され、その期間の間も生産を続行するための貨幣資本であったのである。これは社会的再生産の視点からすれば、それは商品流通に必要な貨幣の前貸である。即ち、「売る前に買う」ために支出される貨幣は自己の商品の販売を先取りしたものであって、それは売れたものとされた商品の価値額であるから、後に行われる販売によってその貨幣は出発点に還流することになるとはいえ、それは販売ではなくそれは売れたものとされた商品の販売代金の回収なのである。回収を目的とした貨幣の支出はその意味で貨幣の前貸という規定を受け取る。この「売る前に買う」ために支出される貨幣を個別資本の立場から見れば、それは生産の連続性の為に投下される貨幣資本の投下ということになる。

この貨幣の前貸を通じて流通期間が短縮され、商品流通が円滑に進むことになる。従って、社会的総生産物の流通は個々の資本が生産を連続化するために行う資本投下によって基本的に推

15) 以下の貨幣流通に関しての詳述は拙著『世界市場恐慌論』第二章第四節(新評論、

進されることになる。ところで剰余価値の流通の場合は事情が異なる。単純再生産においては剰余価値はすべて資本家の個人消費に充当されるわけであるから、資本家が購買するのは生産諸条件ではないから、その「売る前に買う」ということは連続的生産にさしあたりは規定されたものではない。だが、この場合にあって「売る前に買う」という剰余価値の先取りがなされなければ、剰余価値の流通はありえない。この場合の剰余価値の先取りは次ぎの点にある。即ち、資本家は剰余価値を担っている商品が売れてから消費手段を購入するということであれば、そこに流通期間が介入することになり、それが長ければ、彼は餓死することになる。従って、自己の剰余価値を先取りし、自己の所有する貨幣から消費手段を購入するという形態で貨幣を流通に投げ入れ、自己の商品を流通させることによって、その貨幣を回収する。だが、この収入の流通である剰余価値の流通にあっては生産の連続性を維持する貨幣資本の投下に機動力を与えられているのである。

資本家及び労働者の個人消費はその収入の流通によって媒介されるのであるが、労働者の個人消費は生産の連続性に依存することは直ちに理解できる。流動資本の連続的投下がなされているかぎり、労働者は労賃を受け取り、それをもって消費手段を購入することができる。資本家の個人消費は剰余価値の流通に媒介されるのであるが、その剰余価値の流通は商品資本の貨幣資本への転化 $W-G$ の一環をなす。即ち、剰余価値の実現 $w-g$ は資本の運動に規定されているのである。資本の運動 $W-G$ がなされれば、剰余価値は資本の運動から分離され、収入の運動として $g-w$ という別の軌道を歩む。資本の運動 $W-G$ さえ行われれば、あとはいつでも $g-w$ ができるのであるから決定的なのは資本の運動である。資本の運動である $W-G-W$ が進行する限りで資本家の個人消費は進む。この資本の運動は再生産を媒介するものであるから、労働者、資本家の個人消費は再生産の円滑な進

行に規定される。そうして再生産過程は生産の連続性という形態をとることは既に見てきた通りである。

社会的総生産物の流通は生産の連続性に規定されて進むということは、市場の総体が生産の連続性に規定されていることを意味する。この過程は無意識的な社会的合理化過程である。資本主義的市場は寄せ集められた交換主体の集合ではなく、その内に規則的な系(三大流通支点)を持った構造化された全体なのである。各交換主体の集合の非組織的性格にもかかわらず、内的規制と法則をもった全体として市場は構成されており、それが生産に接合される度合いに応じて組織された全体としてその相貌を変えてくるのである。それは閉じられたものではなく、一切をその内に吸収し、各系にそれを振り分け、生産の連続性に条件づけられていくのである。

補 論

生産の連続性によって規定された市場の社会的意味を見てみよう。即ち、この近代的資本主義的市場が非資本主義社会における社会的交換(女性の交換、あるいはクラ交換など)にたいしてもつ類似性とその差異について見てみよう。

I. 社会的希少性の交換

氏族社会における女性の交換において配偶者としては近親はタブーとして遠ざけられることによって女性に社会的な希少性が付与されることになる。しかもそれらの交換される当のものは儀礼を通じて独特の意味が付与されて象徴物として交換された。資本主義的経済にあってはそれは自己の消費の対象としては遠ざけられ、交換のためのみに生産されたものである。しかもその交換において剰余が取得されなければその交換はなされないということになる。この剰余勝ちの取得が目的であり、それはいくらあっても多すぎるということはない。それはいくらあっても希少なものであり、それは豊富の中の希少という形態をとる。ところで商品、貨幣は

平凡極まるものとして独自の意味を持たないようにみえるが、それは商品物神、貨幣物神として象徴でもあったことを想起されたい。ところで、非資本主義社会であっても、独自の意味を付与された象徴としては意識されることなく、交換を自明のこととしておこなっていた筈である。かえって、資本主義社会において交換に際して書類にサインをしたり、女性をはべらせたところで接待という宴会などをしている様子は彼らにとって面倒な儀礼をおこなっているようにみえるはずである。

II. 交換費用

交換費用は基本的に交換当事者の自己負担である。その費用は交換の外部の事情に基づく。資本主義経済にあつては貨幣の負担は交換の外部にある生産の連続性ということであつた。非資本主義社会にあつてはその費用は多ければ多いほどその立場は強化されるが、資本主義経済にあつてはその費用をできるだけ少なくしようとする技術を発展させる。

III. 互酬性

互酬性の関係は系の中でできごとであつて、必ずしもAはBに、BはAにという双務の関係ではなく、その系の中でその関係が実現されればよいということは資本主義の場合でも妥当する。それは三つの系の中で各自が行う「売る前に買う」という行為が自己の商品を実現させているのであつて、負担された貨幣の還流を通じて互酬の関係が実証されるのである。互酬的關係の当事者はその系の中で平等でなければならない。その意味で等しく互酬性が要求されているのであるが、この互酬性に答えられない者は従属的地位にたたせられることになるが、資本主義的経済にあつては「売る前に買う」ことができない者は連続的生産が不可能となり、経営困難、経営破綻となるか、それを回避しようすれば、大資本に従属するほかなくなる。

IV. 時期と空間

時期と空間に関しては資本主義的経済はそれに制約されることはない。前資本主義における

物々交換にあつてはその時期と空間は規定されていたが、それが非資本主義社会にあつてはもっと制約される。資本主義的交換は時期と空間を乗り越えた普遍的展開を示す。それは世界中の需要と供給を集中させ、さらに時間的制約を乗り越えた先物取引を集中させる市場を発展させるに至っている。そこは形式的合理性が徹底的に支配しているところである。

4 市場の組織化と規律の社会化

個別資本の立場からすれば、流通期間の存在は資本に生産の連続性を維持するために一定額の貨幣資本の所有を条件づけ、それはそれだけ資本の制限として作用した。それは社会的再生産の立場からするならば、貨幣の前貸しという規定をとって現れた。ここに商業資本が生成することになる。即ち、商業資本は産業資本と産業資本、産業資本と最終消費者の取引を集中代位することによって独立化する。商業資本は産業資本が行う「売る前に買う」ことをおこなうことによって、流通期間を短縮し、産業資本の生産の連続性を媒介し、もって、産業資本が流通期間のための貨幣資本の所有をそれだけ軽減させることになる。産業資本にとっての流通期間の短縮は回転期間の短縮はそれだけ年利潤率を高め、それが商業資本を存立させることになる。商業資本は社会の貨幣資本の一大部分を支配するようになり、それが産業資本の生産を加速化させ、生産の弾力性を発展させる。生産の連続性のために商業資本が独立化したのであるが、いまや、商業資本によって生産の連続性が媒介されるようになる。

商業資本は不可避的に信用制度と結び付きを持つ。商業資本は産業資本が流通期間のために所有していなければならない貨幣資本の所有を軽減させるが、その負担は商業資本に転嫁されることになるが、その負担は信用によって克服されることになる。

商業信用は「売る前に買う」ことを保障し、

そのことによって商業資本の運動を飛躍的に発展させる。更に、商業信用は銀行信用によって代位されることによってますます強化される。銀行は信用貨幣を創造し、大量の取引を預金通貨によって媒介する。諸支払いの過程的連鎖の決済の人為的体制が発展し、貨幣が現実に出動することなく大量の取引が媒介される。この信用制度は貨幣の節約体制として発展し、その貸付能力を飛躍的に発展させる。それは直接に生産過程の拡大に役立つ「資本の前貸し」を可能にし、産業資本の剰余価値の蓄積をこえた資本投下を可能にし、資本の生産力発展の強力な槓杆をなす。

以上の過程は両義的である。信用制度の発展は産業資本と商業資本を媒介し、その取引が銀行の帳簿に反映し、この信用制度のもとに組織化されることになる。産業資本の生産の連続性、弾力性の発展を媒介するようになり、それらの集合された成果としての社会的再生産過程の弾力性の発展となる。だが、他方で信用制度に支えられた商業資本はその「売る前に買う」ことを繰り返すことによって、購買を絶えず先行させる。産業資本にとっては、最終消費者であれ、商業資本であれそれはどうでもよいことであって、売ればよいのであり、それはそれで販売である。販売される限りで生産は行われる。その過程に架空な需要、空取引という投機的取引が介在しようともそれは販売である。ここに商業資本、信用制度は再生産過程の制限を乗り越えて生産を推進する強力な槓杆となる。

産業資本に対して、商業資本が、産業資本、商業資本に対して信用制度が管制高知として登え立つようになる。この経済的意義を見ておこう。

「富そのもの、即ちブルジョワ的富が、その最高の潜勢力をもつものとして表現されるのは常に、富が媒介者として、つまり交換価値と使用価値という両極それ自体の媒介として、措定される交換価値においてである、ということを書述べておくことは重要なことである。この中間

項は、それが対立物を総括するものであるがゆえに、つねに、完成された経済的關係として現れ、また最終的には常に、両極それ自体に比べて、一方的により高次の潜勢力として現れる。何故なら、運動ないし関係は、最初は、両極の間を媒介するものとして現れるのだが、やがて弁証法的に必然的に進展して、その結果、即ち両極を専ら自己の契機とするような主体として現れるようになり、しかも主体は両極の自立的な前提を止揚し、このように己の諸契機を止揚することによって、自分自身を唯一の自立的なものとして措定するようになるからである。このようにして宗教の領域では神と人間との仲介者……であるキリストは両者の統一即ち神人となり、しかもそのような神人として神よりも重要になる。聖徒がキリストよりも重要になり、僧侶が聖徒よりも重要になる。……資本そのものの内部では、資本のある形態が再び使用価値の位置を占め、交換価値としての他の形態に対立する。そこで例えば産業資本は、流通として現れる商人に対しては、生産者として現れる。こうして産業資本は素材面を表し、商人は形態面をを、つまり富としての富を表す。同時に商業資本そのものはまた、生産(産業資本)と流通(消費者大衆)との媒介者、言い換えれば交換価値と使用価値との媒介者であって、そこでは生産が貨幣として、流通が使用価値(消費者大衆)として、というように、両項が互いに交代して指定されるのである」¹⁶⁾

長々と引用したが、以上はマルクスの方法の決定的に重要な部分である。そこでは中間項としての媒介項が媒介する両項を総括するものとしてより高次のものとして現れてくるのである。

「富そのものはそれが直接的生産過程から遠く離れれば離れるほど、しかも、おのおのをそれ自体として見ればどちらも既に経済的形態関連として措定されているような両項の間を、それ自身が再び媒介するようになればなるほど、

16)『資本論草稿集』I「1857-8年草稿」1, 408-9頁。

最も明確に、また最も広範に自分を現すのである。そして媒介のより高次の形態が常に資本として、より低次の形態そのものを再び労働として、ただ剰余価値の源泉としてだけ指定するということ。例えば手形仲買人、銀行家などは工場主に対置されるが、その後者は前者に対して相対的に労働(使用価値)の規定で指定され、他方前者は、後者に対して資本として、剰余価値の創出として自己を指定する」¹⁷⁾

以上のごとくより高次の媒介者によって社会的総資本が媒介され組織されていくのであり、それは市場の媒介形態でもあり、それは市場の組織化の過程でもある。かくして媒介者によって総括される市場は資本相互のより緊密な運動の形成でもある。それは連続的生産の運動であり、規律の運動でもあった。だが、この過程は同時に産業資本の生産の弾力性の発展の過程でもあり、それは再生産過程の諸制限を乗り越えていく傾向を産みだし、それは周期的な恐慌となって現れた。この恐慌の特徴は商業恐慌と銀行恐慌という形態をとって現れた。即ち、恐慌は生産の部面ではそれほど激しくないのに、卸し売り業と銀行業に最も激しく襲いかかったのである。それは商業資本と信用制度が「売る前に買う」という行為を最も促進したからである。生産の場面は規律によって組織され、経済の変動を調整していく能力がそれだけ高いのである。力は生産点から遠くなればなるほど枯渇し、それは力が生み出される中心からずれるほど、その調整力は低下していくものであることを意味する。

ここに激しい恐慌が生じるというのもそれは産業資本の側からする流通過程の接合と組織化の弱さの反映でもあった。この段階の資本主義の調整は基本的に競争的調整とも言うべきものであって、それは流通過程と信用制度における組織力の未発展の調整様式に他ならなかった。市場は基本的に価格調節的市場が支配的なもの

であった。その価格の運動を生産の側からは不十分にしか制御できない段階のものであった。この価格調整的な運動を制御できず、その自然法則化した運動に委ねられなければならない調整的過程は結局は強いものが勝ち残る競争の過程であった。利潤率を不均等化させようとする部門内競争は資本をして生産様式の変革に駆り立て、それができない弱小劣等資本を淘汰する。他方、部門間競争によって弱小劣等資本は最低必要資本量の少ない部門への移動という形態での資本の移出入が需給を調整する。それは市場価格の変動を指標に行う。この市場価格は市場価値によって規定されるのであるが、その市場価値は市場調整価格として機能する。需要が強ければ、劣等な資本が市場価値を規制し、劣等な資本でも再生産可能なように市場価値が上昇する。その上昇した市場価値のもとで需給を一致させ、需給を均衡させるという意味においてそれは調整的なのである。逆に需要が弱いときには市場価値が低下するという形態を通じて需給が調整され、一致する。このような価格を設定するのが需要と供給を自己に集中させ、その双方を知る立場にある商業資本である。この商業資本を介して一物一価が成立する。この一物一価はそれ自体合理化過程の表現でもある。

競争は本質的に力(Macht)対力(Macht)、勢力(Mächte)対勢力(Mächte)の闘いである。需要と供給は購買者の勢力と販売者の勢力の対立である。勢力間の争いはいずれが「統一した団結」を保持しているかにかかっている。競争は対立する数に比例し、その規模に反比例する。いまだ数が多く、規模も大きくない諸資本の対立はその調整を不可能にし、価格にその調節を委ねる他なく商業資本という媒介者を必要とした。こうした所では価格を媒介にした弱者にその矛盾が集中する。これが競争的調整である。商業資本という媒介者抜きに市場を調節するには、生産の側における資本規模の拡大とその数が減少し、「統一した団結」を保持が恒常的となることが必要である。それが市場支配を可能にする

17) 同上、409-11頁。

が、それは資本主義の独占段階になったのである。かつては前期的商業資本によって支配されていた生産はそれを媒介者に格下げしたが、それを不要にするにはさらなる規律の深化を伴った生産過程を必要とする。この産業資本の弱さの表現が商業資本、信用制度に激しい矛盾が集中したのである。

マルクスの恐慌論の認識がこの点において役立つ。即ちイギリスで生じた恐慌はイギリスでは恐慌でもって終わったが、大陸の周辺国はそれは革命にまで発展した。それはイギリスは世界の中心、心臓部であるがゆえにその調整力が発揮されたが、その周辺、末端組織には調整力が及ばず、そこはそれだけ激しい痙攣、統合力の低下として現れたのである。この中心—周辺、心臓部—末端組織という認識は国内にも適用しうるであろう。

恐慌の震源地はイギリスであるがそれがヨーロッパ大陸諸国では恐慌は革命の波となったが、その波がイギリスに押し寄せるには、恐慌がアジアにまでひろがり、それが革命の波としてヨーロッパに押し寄せるときだけだという確信がマルクスをして恐慌にその関心を集中させることになった¹⁸⁾。ここにはアジアは西欧の革命にとっての道具でしかないという西欧中心史観がみえる。未開発地域は資本に接触することによってかえって低開発地域にされるという弁証法があるのである。資本の文明化作用に対するこの素朴さは後には登場しなくなるが、ここには合理化過程＝規律の深化に対する認識の不十分さがある。周辺諸国における革命は資本・賃労働関係の確立を軸にしたものではなく、むしろ資本主義的生産が要求する規律への拒否、資本主義の未確立の基づくものであった。それは民衆の資本の包摂への拒否、既存の生活を守ろうとするものであった。

資本のもとへの実質的包摂が実現されている

ところでは、それを変革するという論理は出でこない。規律を内面化した労働者よりもそれをこれから自己の運命として引き受けなければならない者の方にこそ生活の困窮が現れるという弁証法がそこにある。規律を内面化し、それが体制として確立している所では、矛盾を周辺に転嫁させる機構を作りだすがゆえに、調整力のない周辺部に矛盾が集中することになる。

だが、それが変革における周辺から中心へという論理には必ずしもならないであろう。先にみたように生産の内部にも資本は抑圧の中の抑圧を作り出すということをみてきた。生産の外部にあっても相対的過剰人口という特殊な層を作り出す。これは流動的形態、潜在的形態、停滞的形態というヒエラルキー的な編成をもつ。それはそれだけ劣悪化していく編成である。しかもこの部分からの沈没物が受救貧民である。これらの内で産業予備軍に対応するものは流動的形態、潜在的形態のみである。産業予備軍は現役軍との代替性を持つ点においてそれは停滞的、あるいは受救貧民とも区別さる。受救貧民という縁辺的(マージナル)な部分はその知的肉体的荒廃によって資本の課す規律に耐えられるものではなく、代替不可能である。労働者のうちには周辺にいけばいくほどそこに矛盾が集中していることになる。したがって、周辺には汲めども尽きぬ貧困があるとはいえ、そこが変革の機動力の生産点になるということにはならない。

周辺から中心へというマルクスの基本戦略はレーニンにも継承されている。世界資本主義の矛盾の集中点としての「鎖の最も弱い環」から革命は始まることになる。恐慌とか戦争に革命の戦略を委ねなければならないのは次ぎの点にある。資本の運動とその担い手の暴走(恐慌、戦争)を民衆が阻止できず、その結果が民衆に最も激しく襲いかかる状況のもとでは、その危機が不可避免的であればその危機が生じることを予想し、惹き起こされた状況を利用してその危機を生み出す体制そのものを変革するしかないという

18) このマルクスの恐慌と革命の関係については、山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』(未来社、1969年)の第二部「世界史像の再検討」に学んでいる。

ことになる。革命はその時にはカリスマが危機的状況を前にした民衆の相互の利害を一時的に凍結した熔融状態、団結を操作するものとして現れる。それは民衆の力の弱さ、その知的文化的能力の弱さの表現でもあった。従って、以上のマルクスの構想は根本的に再吟味されなければならないものである。

資本主義の発展は同時に合理化過程の発展で

もあり、それは資本主義の組織化の発展でもある。それは政治、法、文化の総体を経済に接合した歴史的ブロックの発展でもある。そうした新しい国家の次元においては、国家の内と外における合理性と非合理性との相関は新しい相貌をもって現れてくる。それを次号において取り上げるはずである。